

(報告) 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 哲学分野」

1 哲学の存在意義としての教育

哲学が現代社会に貢献する最も重要な回路は教育である。その目標は人類の文明を継承し、かつ、民主主義社会における熟議に参加・寄与する人間を育てることである。

学術会議の哲学委員会は、2010年4月に「報告 哲学分野の展望—共に生きる価値を照らす哲学へ—」、2015年5月に「提言 未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—〈考える「倫理」〉の実現に向けて—」を發表し、哲学の教育上の役割について議論を重ねてきた。本参照基準は、これらを受けた上で、大学の教育課程や授業の現状をふまえ、伝統的教育方法の意義を改めて確認しつつも、応用・臨床哲学などを中心に、あらたな教育方法が豊かな可能性を示すものとして広がりつつあることを考慮するものである。

2 哲学の定義と固有の特性

「哲学」については様々な定義が存在するが、ここでは「われわれが生きる世界を総体として理解するために参照すべき枠組みの構築」と規定する。欧米の大学の哲学教育の対象はもっぱら西洋哲学に限定されているが、日本の大学の伝統に基づく本参照基準は、科学哲学、倫理学、美学芸術学、日本思想史、中国哲学、インド哲学・仏教学、宗教学の8分野を「哲学系諸学」として包摂している。この伝統は、日本の学生に多様な学修内容を提供するとともに、西洋哲学を他地域の思想・知的実践と比較し、それを相対化すること、翻っては自らの拠り立つ基盤をもまた反省することを可能にし、より徹底した哲学的思考を促す教育環境を形成してきた。

3 哲学系諸学を学ぶすべての学生が身につけることをめざすべき基本的な素養

哲学系諸学の学修過程においては、古今東西の哲学者や思想家、著作家、芸術家、宗教家の思索についての「知識」、そうした先行者の思索に触発されつつ自己の思考を深める「能力」、そしてその結果を現代における新しいものの見方や価値観と照らし合わせ、結びつけながら自らの基盤を問い直し、自らの実践の糧とする「態度」の三者を身につけることがめざされる。

哲学的能力の要となるのは他ならぬ「思考力」である。哲学系諸学の学修は、ロジカル／クリティカルシンキングといったジェネリック・スキルとしての思考力を伸ばすとともに、さらに専門的な学修を通して、様々な問題を原理・価値観・世界観などの深い次元においてとらえ、適切に哲学の知識・概念を活用して思考し、問題解決への展望と道筋を得る能力を育成する。